

# 教職随想

2019.05 後藤 忠

私が初めて学級担任をした教え子の紹介で致知出版社からの取材を受けた。

ありふれた、ごく普通の教師である自分には人様に語れるものなど何もないと固辞したのだが、それでもよいと言われて、恥を忍んで受けた次第である。

他方、道徳科が稼働し始めた今、世の人々に学校の道徳教育に関心を寄せていただくよい機会になるかもしれないと思ったのも事実である。

その記事に少し修正を加え、ここに掲載させていただく。

(月刊「致知」2019年5月号：致知出版社より一部転載)

\* \* \* \* \*

小学校教育に「道徳科」が導入されて1年が経った。

全国津々浦々の小学生が道徳の教科書を使って道徳の勉強ができるようになってよかったという声に混じって、「道徳の授業のやり方がよく分からない。指導したことが子供の身に付かない」といった悩みの声も聞かれる。

かくいう私も教師駆け出しの頃

は道徳の指導がうまくいかず暗中模索の連続だった。

それがふとした縁で道徳教育の重要性に目覚め、とうとうライフワークになってしまった。

公立学校を定年退職して12年になるが、今も学校や教育委員会から頼まれれば微力ながら教員研修のお手伝いをさせていただいている。

また、「後藤忠の心を育てる道徳科授業」というホームページを2年前に開設し、道徳の指導に困まっている先生方に必要な情報提供をさせていただいている。

「特別の教科 道徳」が本格稼働したとはいえ、まだまだ授業の充実が求められる心の教育である。私の拙い教職経験が少しでも学校のお役に立つのなら、こんなに嬉しいことはない。

私の教職のスタートは鹿児島県の私立高校（体育教師）だった。

その間に、通信教育で小学校の教員免許を取得し、昭和48年26歳で東京都の小学校教員になった。

最初の勤務地であった墨田区で、たまたま区の道徳研究部に所属し

たのが道徳とかかわるきっかけであった。

高校の体育教師だった私は体育の研究がしたかったが、勤務校には体育で有名なA先生がおられ、体育部に入ることはできなかった。

空席は道徳部で、誰も入り手がなかったようだ。私も道徳という何だかよく分からない研究部に入ることは気が進まなかったが、上司に叱られてしぶしぶ入らされたというのが本当のところである。来年は必ず転部させてもらおうと思っていた。

そんな私が道徳教育に本気で取り組むようになったのは、研究部長の久保千里先生の温厚なお人柄と奥深いご識見に強く魅せられたからである。久保先生は五十代半ばの威風堂々とした校長先生で、私たち若手教師を親身になってご指導くださった。

私が最も驚いたのは、久保先生の道徳教育のお考えが私のそれとは大きく異なっていたことである。

私は「本物の道徳は道徳的な人が教えるもの」と思っていた。自分のように未熟で不完全な人間には道徳なんて教えられないと。

だから道徳授業が一番苦手で、授業に身が入らず、その場しのぎのお座なりな「押し付け道徳」を繰り返していた。そんな私に久保先生は

「分かっているてもできない、それも人間だ。人間とは何か、そこを追究するのが道徳だよ」と諭してくださった。

「善悪を上から教えるのは道徳ではない。善いか悪いかくらい子供はちゃんと分かっている。道徳の時間は“教える”という気持ちを捨てなさい。教師の役目は子供を理解すること、子供から学ぼうとする姿勢をもつことです」

暗中模索だった道徳授業のイメージが先生のご指導によって次第にはっきりしてきた。

道徳は教えなければならぬもの、身に付けさせなければならぬものと思い込んでいた私には、まさに目から鱗が落ちる衝撃だった。

実際、その姿勢で授業をしていくと子供たちは徐々に変わっていき、道徳が好きになっていった。

私が東京都を退職して5年目のことだった。某校長先生から「乱れている子供の心を道徳の時間で豊かに育て、健全育成を図りたい。ついては校内研究の年間講師をお願いしたい」という依頼を受けた。

私は「道徳の授業は子供の10年先、20年先に向けて種を蒔くような気の長いことをする授業だから、問題行動を解決する特効薬にはならない」と丁重にお断りしたが、「そ

れでよい」と言われるので引き受けることにした。

その際、校長先生に「道徳の時間に指導したことは子供の身には付かないし、生活態度も変わらないから、授業では道徳を教えようとしないうで、子供の声を待つ、聴く、受け止めることに徹すること」を先生方によく言い聞かせておいてほしいとお願いした。

先生方は実に誠実に、熱心に週1回の道徳授業を重ねていった。やがて1年が終わる頃、養護教諭から校長先生に「この頃、保健室の空気がしっとり潤ってきたように感じる」と報告があったそうだ。

道徳授業を丁寧に重ねていくと子供の心は確かに変わる。

道徳の時間に、子供は教材（の登場人物）に自分を重ねながら自分を見つめる学習をしている。そして、正直や誠実、友情や信頼、節度や節制、勤勉や努力といった道徳的な価値の大切さについて少しずつ理解（自覚）を深めていく。

と同時に、それらの価値は大切だと分かっているにもかかわらず、なかなか実現できない弱さが自分にあることも理解し、また、価値を実現したり、実現できなかったりした時の受け止め方や感じ方は人によって違うことも理解していく。

こうした学習を繰り返していくと、自己を見つめる習慣や自己を見つめる力が少しずつ身に付いてくる。すると、自分のことを棚に上げて人ばかり責めるようなことはしなくなってくる。

道徳性の深まりとは、自己を見つめる見つめ方の深まりのことだと私は思う。

子供が本気で自己と向き合い、自己を見つめる授業は、小手先の指導ではできない。

同じ人間として発展途上中である教師が自ら子供に心を開き、自己を見つめ、子供に教わりながら子供とともに成長していく、そうした姿勢の中から生まれてくるのだ。

永年、病気知らずの私だったが2年前に大腸がんを患い、手術を受けた。多くの幸運と奇跡に恵まれがんは根治したが、がんは私に「生命の有限性」を実感をもって教えてくれた。

救っていただき、生かされている生命を微力ながら道徳教育の普及と振興に使わせていただきたいと切に願っている。